# 市史の窓　No25

## 平井神社の宮座文書

### 書きつづけられ…270年

今回は、平井神社の宮座にかんする資料を紹介します。

平井神社の宮座（祭礼を執行するための組織）には、輪番の頭家（当家）の人たちによって書きつがれた『祇園午頭天王諸宮覚帳、宮中間中』という文書があります。

この文書には、長い間の村内外の出来事が継続して記録されています。江戸時代の記録は少なく、頭家の名前だけのものや、社殿修復、造営など宮座に関した記事のほか、享和二年（一八〇二年）の大洪水、天保七年（一八三六年）の大凶作それに続く、八年の大飢饉、嘉永五年（一八五二年）の『富野村切大洪水出』の記事などがみえます。

明治時代になると記事も多くなり、その年の大きなできごとをとりあげています。例えば、明治十年（一八七七年）の『九州鹿児島県大戦争、右者西郷隆盛ノ件』有名な西南戦争の記事、明治二十七年（一八九四年）『本年ハ我皇国開始以来無之大要件起云々』で始まる日清戦争の記事を始めとして、明治三十七年の日露戦争、明治四十二年（一九〇九年）韓国併合、大正七年（一九一八年）の米騒動に関する記事、大正十二年（一九二三年）の関東大震災、昭和二十年（一九四五年）B29による爆撃で家屋が倒壊し、その後しまつのために村民総がかりであたったことなどが記され、以下戦後も各年度ごとに記事が続いています。

以上のように、この文書は、村内の状況はもとより全国の事件におよぶ社会史であり、それらをどう城陽の住民がうけとめていたかが知られ、民衆史の史料として興味ある文書であります。

この文書が、元禄十五年から、現在まで絶えることなく書きつがれていることは大変貴重なことであります。